

「オン・ザ・ロード」★★★★★

2013（平成25）年7月29日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：ウォルター・サレス
製作総指揮：フランシス・フォード・コッポラ
製作：レベッカ・イエルダム、ロマン・コッポラ
原作：ジャック・ケルアック『路上／オン・ザ・ロード』（河出書房新社刊）
ディーン・モリアーティ（奔放かつ刹那的に生きる青年）／ギャレット・ヘドランド
サル・パラダイス（作家志望の男）／サム・ライリー
メリールウ（ディーンの子16歳の妻、旅のパートナー）／クリステン・スチュワート
ジェーン（ちょっと病的な赤毛のブル・リーの妻）／エイミー・アダムス
カーロ・マルクス（サルの友人、ゲイの詩人）／トム・スターリッジ
エド・ダンケル（ディーンの子友人）／ダニー・モーガン
テリー（サルが恋に落ちるメキシコ人娘）／アリシー・ブラガ
ギャラテア・ダンケル（エドが置き去りにした新妻）／エリザベス・モス
カミール（ディーンの子新しい妻）／キルスティン・ダンスト
オールド・ブル・リー（元教師のジャンキー）／ヴィゴ・モーテンセン
2012年・フランス、ブラジル映画・139分
配給／ブロードメディア・スタジオ

＜原作は？「ヒッピーの聖典」とは？＞

狭い日本の中にと、広い世界を見るチャンスが少ないが、映画を観てそこからいろいろ勉強すると、時々それまで全然知らなかった広い世界を知ることができる。本作はまさにその典型だ。J・D・サリンジャーが1951年に書いた小説『ライ麦畑でつかまえて』は、私が1967年に入学した大学1年生の時の英語の教材に使われたからその存在を知っているが、アメリカで人気の現代小説といっても、そのほとんどは知らない。本作の原作である、ジャック・ケルアックが1957年に発表した『路上／オン・ザ・ロード』についても同様で、それを知っている日本人はほとんどいないだろう。

この本について、プレスシートにあるイントロダクションは、「1950年代アメリカのビート・ジェネレーション文学の代表作であり、その後のカウンターカルチャーの時代に「ヒッピーの聖典」となった青春小説の名作である」、と紹介している。しかし、この紹介をちゃんと理解するためには、①ビート・ジェネレーション文学、②カウンターカルチャー、③ヒッピーなるものの理解が不可欠。そして、それに続く「ケルアックが全米各地とメキシコを放浪した実体験をベースに、わずか3週間で書き上げたという逸話も語り継がれるこの名作は、ボブ・ディランに『僕の人生を変えた本』と言わしめ、ジム・モリソン、ジョン・レノン、ブルース・スプリングスティーン、ニール・ヤングといったミュージシャンや、デニス・ホッパー、ジム・ジャームッシュ、ジョニー・デップらの映画人に多大な影響を与えた」という説明を読めば、少しイメージが理解できる。

＜原作とコッポラ家そして監督に注目！＞

このように、本作の原作は世界中のアートや思想に決定的な影響を与えたジャック・ケルアックの不朽のビート文学だから、ハリウッドがこれを映画化したいと考えたのは当然で、過去に何度も映画化の話が持ち上がったそう。もっとも、この原作は作者自身が親友のディーン・モリアーティと共に広い広いアメリカ大陸を縦横に旅していく壮大な旅行記だから、映画化にふさわしい劇的なストーリーがあるわけではない。したがって、ケルアック独特の即興的な文体と明確な起承転結のないストーリーなどがネックとなり、ことごとく企画は頓挫したらしい。ところが、この物語に関心を示したハリウッドの巨匠フランシス・フォード・コッポラが原作の映画化権を買取り、さらに『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）（『シネマールム7』218頁参照）に感銘を受けた彼が、それを監督したブラジル人監督ウォルター・サレスを本作の監督に起用する話がまとまったところから、大きく映画化が進んだ。そして、フランシス・フォード・コッポラが製作総指揮を務め、コッポラの子息であるロマン・コッポラが製作を務めることによって映画化の話が遂に具体化し、本作の完成に至ったわけだ。

本作の製作費は2500万ドル（約25億円）だが、そんなウラ話を聞いていると、1本の映画を製作し公開するためには膨大なエネルギーが必要だということがよくわかる。したがって、本作を鑑賞するについては、内容もさることながら、本作にみる原作とコッポラ家そしてウォルター・サレス監督の関係をしっかりと勉強してみるのも一興だ。

＜同じ監督のあの「ロードムービー」と比べると・・・？＞

本作と同じようなロードムービーで、同じブラジル人監督ウォルター・サレスによる『モーターサイクル・ダイアリーズ』は、2005朝日ベストテン映画祭の5位に入賞した名作だが、その主人公は若き日のチェ・ゲバラ。そう、「キューバ革命」で有名な、あのゲバラだ。『モーターサイクル・ダイアリーズ』は23歳の医学生だったゲバラが、自分は何者なのか？人のため、社会のために何ができるのか？と考え、その「何か」を求めるためのオートバイの旅を記した『モーターサイクル・ダイアリーズ』と『チェ・ゲバラ モーターサイクル南米旅行日記』を原作として、ウォルター・サレス監督が映画化したものだった。1万キロに及ぶラテン・アメリカの旅の中で彼が感じとったのは、共産党員であるために追放され、やむなく旅を続けているインディオの夫婦や、危険な鉱山で馬や牛のように働かされる原住民たちの姿だったらしい。その中で培われた人間に対する興味が、カストロとの出会いの中で革命に向かっていったわけだ。

このような、どちらかというと生真面目なゲバラとは大違いの、若き作家サル・パラダイス（サム・ライリー）が強く影響を受けた男ディーン・モリアーティ（ギャレット・ヘドランド）は「これぞヒッピー！」という自由奔放な男だった。ディーンは少年院上がりですり泥棒の常習犯。おまけに16歳の恋人メリールウ（クリステン・スチュワート）と結婚したという型破りな噂の絶えない人物だった。そんな男の出現によって、父親を亡くした喪失感に囚われている若き作家サルのやるせない日常は一変していくことに・・・。

＜同じ「ロードムービー」でも目的も手段も大違い！＞

サルが友人のカーロ・マルクス（トム・スターリッジ）と共に、はじめてディーンのアパートを訪れた時の出会いは強烈だ。エネルギーにあふれた若者の欲望のはけ口がセックスに向かうのは当然だが、部屋の中から2人を迎えたディーンはなんと素っ裸。部屋の中で意気投合し、酒、マリファナ、女と共にどんちゃん騒ぎをくり広げた彼らは、夜明けには亡くなった父親の思い出話などもしりみりと・・・。このディーンとの出会いをきっかけにサルの1947年7月から1950年まで続くアメリカ大陸での旅が始まったわけだが、作家志望のサルだけにその記録を書き続けていたのが偉い。サルの最初の旅はニューヨークの実家からディーンの子故郷である西部のデンバーへのヒッチハイクの旅だったが、その後のほとんどはディーンたちとの（盗んだ）車での旅。

『モーターサイクル・ダイアリーズ』に見るチェ・ゲバラは一人で「怪力（ボデーローサ）号」に乗って、生きていくための「何か」を求める真面目な旅を続けた。しかし、本作に見るサルがディーンたちと共に続けるアメリカ大陸の旅は、そのほとんどがヒッピー的なもの。したがって、良識派からみると肩をひそめるものも多い。しかし、あの当時のエネルギーにあふれたアメリカの若者たちが、酒とマリファナと女を求めながら縦横に続ける旅がハチャメチャなのはむしろ当たり前・・・。同じ「ロードムービー」でも目的も手段も大違いだ。

＜この奔放な男の生き方に賛成？それとも反発？＞

本作で圧倒的な存在感を見せるのは、サルがその生き方に大きな影響を受け、それを『路上／オン・ザ・ロード』にまとめた男ディーン・モリアーティだ。ディーンはサルとの旅の多くに同行するかわい子16歳のメリールウと結婚していたそうだが、その後はメリールウと離婚手続を進め、サンフランシスコに住む大人びた金髪の女性カミール（キルスティン・ダンスト）と結婚し、エイミーという娘までもうけているらしい。それはそれでいいのだが、ディーンはサルに対して「メリールウこそ本当に愛する女だ」と真面目に語っているから、さて彼の神経はいかかなもの？また、ディーンは真面目に話せばそれなりの論理性もあり面白い男だが、そのほとんどは酒、マリファナ、女だから、乱交パーティーも度々らしい。ところが、そんな話を面白おかしくかつ自慢気に語りながら、同時に「家族を持つっていいよな」とも言うから、何とも不思議な感覚の持ち主だ。

さらに、ディーン、サル、メリールウの3人がアフリカ帰りのカーロと共にニューヨークで1949年の年明けを祝った時（ちなみにこの1949年の1月は私が生まれた月）には、ディーンはサルに対して「お前に頼みがある。大事なことだ」と何やら深刻そうな話を切り出してきた。そこでサルがディーンの子ベッドルームに入ると、そこでディーンから頼まれたのは「メリールウが他の男とやっている姿を見たい」というとんでもないことだった。しかも、サルがベッドに入ると、メリールウは「他の男は嫌だけど、あなたならいい」とディーンに言ったの」というから、こりゃどっちもどっち・・・。しかして、あなたはこの奔放な男の生き方に賛成？それとも反発？

＜サブストーリーにも興味深い人物が！＞

原作であるジャック・ケルアックの『路上／オン・ザ・ロード』が「不朽のビート文学」と呼ばれるのは、2人の主人公となるディーンとサルの旅の中に、ちょっとしたサブストーリーがあり、そこにも興味深い人物が登場していることが一つの理由だ。本作に見る「その1」は、ディーンとの出会いの中で旅の楽しさを実感した（？）サルが、デンバーを発ってロサンゼルスに向かっている時、そのバスの中に一人乗っていたメキシコ人女性テリー（アリシー・ブラガ）と知り合い、恋に落ちるストーリー。大阪風に言えばこれは単なる「ひっかけ」だが、このシーンからこの2人はカリフォルニア州のセルマでバスを降り、綿花畑で働きながら束の間の共同生活（夫婦生活？）をくり広げることになる。

面白いサブストーリー「その2」は、エド・ダンケル（ダニー・モーガン）が置き去りにした妻のギャラテア・ダンケル（エリザベス・モス）を引き取るために、ディーン、サル、メリールウの3人がエドと共に車を飛ばしてルイジアナ州にあるオールド・ブル・リー（ヴィゴ・モーテンセン）の家を訪れた時のストーリー。帽子と眼鏡がトレードマークの元教師でジャンキーのブル・リーと、ちょっと病的な赤毛の妻ジェーン（エイミー・アダムス）との間でくり広げられる、哲学的で風変わりな会話（？）の数々をしっかりと味わいたい。

＜メキシコへ！新たな刺激を！しかし・・・＞

私はアメリカ（大陸）の地理に詳しくないから、ディーンとサルの2人を中心としたそれを縦横にめぐる（車での）旅がいかに大変かはよくわからない。しかし、アメリカ（大陸）の地理をよく知っている人は、ロードムービーの楽しさをより実感できるはずだ。しかし、カミールとの間に2人目の子供が産まれる予定となっているディーンの子あんなにいい加減な性格では、ずっとカミールをだまし通せるはずはないから、カミールとの結婚生活はいよいよダメらしい。また、メリールウの方も、実はディーンとは別に水兵の婚約者がいることをサルに告げるとともに、「家がほしいの。赤ちゃんも。まともな生活を求めているの」と訴えていたから、そろそろディーンは見切り時・・・。

そんな中、はじめてサルとメリールウが互いの寂しさを埋め合わせるかのように、モデルで一夜を共にし結ばれたから、私は一瞬これがサルの新たな出発点かと思ったが、どうもそうではなかったらしい。他方、ディーンがサルと共に故郷のデンバーに戻り、失踪した父親を捜すことにしたのは、それなりの心境の変化があったため。しかし、そこでは何の手がかりも得られなかったから、カミールに去られ、メリールウにも去られたディーンの子失意はいよいよどん底？そう思っていると、そこから衝撃的に2人はめくるめくメキシコへの旅に向かうことになったから、ビックリ！

若さとはいいいものだ。そしてまた、何ともいい加減なものだ。2人がどうやってそのカネを工面したのかは映画の中では明らかではないが、カネさえあれば異国の情熱的な地での酒、マリファナ、女づけの生活は楽しいはず。2人は毎日のようにめくるめく日々をメキシコで送っていたが、そこでサルが赤痢に倒れたからヤバイ。こんな時こそ、親友のディーンは献身的な看病を。当然そう思ったが、そこで見せたディーンの子態度に私は唖然。当の本人サルはこんなディーンの子態度をもっと深刻にとらえ、ディーンの子人間性を見つめ直したはずだ。しかして、3年間にわたって続いてきた2人の旅は、いよいよ終焉に・・・？

＜それぞれの「旅の終わり」は・・・？＞

私のカラオケのレパートリーは、ひと昔（？）前の安室奈美恵、モーニング娘。を含め現在のAKB48から演歌、軍歌まで幅広い。そして、冠二郎の『望楼の果て』も私のレパートリーの一つだ。そのカラオケの画面には、「シルクロードの旅人が、疲れをいやす桃源郷も」「遥か天山崑崙見れば、偲ぶ昔の猛者たちよ」などの歌詞を彷彿させる、中国の莫高窟などシルクロード周辺の風景がたくさん出てくるので、旅の哀愁に満ちている。ちなみに、冠二郎の名曲『旅の終りに』は、1977年のテレビドラマ『海峡物語』の主題歌で、五木寛之も作詞に参加した曲だが、この曲の持つ旅の哀愁もすばらしい。

しかして、本作ではディーンとサルの多くの旅に付き添っていたメリールウがまず「旅の終わり」を迎えることになる。その姿がどんなものかは本作ではわからないが、女は賢い動物だから、きっと彼女はそれまでの奔放な生活をきっぱりと捨て、恋人の水兵さんとまともな結婚生活に入ったのだろう。他方、メキシコへの旅から何とか一人でニューヨークへ戻ったサルは、どんな生活を？また、赤痢で苦しむサルを一人メキシコに置き去りにしたまま故郷のデンバーに戻ったディーンは、どんな生活を？そんな2人がニューヨークで何度目かの再会を果たすシーンは、ここまで自由奔放に生きて来た若者であっても、その大きな変化を感じざるをえない。

ジャック・ケルアックは『路上／オン・ザ・ロード』をわずか3週間で書き上げたそうだが、3年間にわたる自分自身の取材メモがあるうえ、それぞれの出来事は自分の体験として強烈にインプットされていたからそれができたのだろう。もっとも、乱交パーティーやスピード違反までは事実をそのまま書いてもいいだろうが、すり泥棒の数々までは露骨に事実即して書くわけには・・・？人生そのものに「旅の終わり」があるのと同じように、ディーンと出会うことによって始まったサルのアメリカ大陸を縦横に動き回った旅も遂に終わりを迎えたわけだ。しかし、その物語がこうしてジャック・ケルアックの手によって出版されると、それはその後「不朽のビート文学」として永遠に生き続けているわけだからすごい。あらためて、原作とコッポラ家、そしてウォルター・サレス監督に拍手！